

d. 土器の変化—外来系を中心に

i. C系統土器とその周辺について

C系統は条痕手法の違いからCa系：二枚貝条痕系とCb系：櫛条痕系に区分できる。しかし、土器のセットでは、二枚貝条痕系には壺と深鉢の組み合わせが成立しているのに対し、櫛条痕系深鉢には櫛条痕系壺の組成が見られない⁽²⁶⁾。両者のそうした相違に注目するなら、二枚貝条痕系と櫛条痕系は下位レベルにおいて「使用」は別にして技術的には独立した2つの系統に区分するほうが、より実態に即したものといえる。

*

Ca系統 壺の紋様的特徴は、口唇部の刻み、口縁部外面の無紋、頸部中央の隆起とそこへの沈線紋、頸体部境界紋様としての複合鋸齒紋、体部の二枚貝条痕と連環状弧紋である。深鉢は、口唇部と口縁部内面の二枚貝条痕である。色調は灰色系で、胎土には角張った砂礫が含まれている。成形時におけるハケメ工具の使用はI-1期には認められない。この時期に限ってはCb系統と軌を一にしている。しかしI-2期になるとハケメ調整が表面化する。

II期以降、Ca系統はその存在が不明瞭になる。A系統に収斂されるのであろう。

**

Cb系統 深鉢はCa系統と色調が異なり茶褐色系である。荒々しい条痕のタッチが非常に特徴的である。口縁部内面には櫛刺突紋が施される。底部には必ず布目圧痕を残す。

口縁部内面の櫛刺突紋。I-1期は、施紋部が口縁部上端寄りに圧縮されていることに関係して原体の傾きが大きく、施紋動作も押し引き状である。I-2期以降は口縁部に対して直交位置に点列として施されるようになる。

Cb系統深鉢はII期以降も連続する。ハケメ調整も最後まで採用されない。ほとんど変化を見せない中で、わずかに口縁部内面の刺突紋に上述したような時期的な差が現れる。

とくに指摘しておきたいのは、阿弥陀寺遺跡での類例が少なく地域差にも関わる要素であるけれども、内面の刺突紋が羽状や山形状に施される例は古く、刺突紋に波状紋が組み合う例は新しい様相を示すものである。



複合鋸齒紋



連環状弧紋(沈線付加) 地紋は二枚貝条痕

第250図 Ca系統壺紋様の特徴

* * *

付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺 C系統をCa系統とCb系統に区分するとき問題になるのは、付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺の帰属である。本例は体部上半に付加沈線二枚貝刺突による連弧紋が研磨手法と組み合わせて施され、体部下半には櫛条痕が施されている。帰属系統に関しては、分布的には尾張地方に限定されるからB系統は関係ない。また、付加沈線と研磨による磨消帶の形成はA系統の紋様手法と共に通するものの、意匠が異なる。とすればC系統しか残らない。体部下半の条痕は二枚貝ではないので、Cb系に接近したものということになるが。

ところで、二枚貝刺突紋と紋様・調整手法的の近接した壺を探すと、土器220のような爪形紋の施された壺を挙げることができる。個別表現は異なるものの、原体の動きは「刺突紋」という用語は別にして押し引き状の例もあり共通しているし、紋様構成上も頭部の横帯、体部の連弧紋そして研磨、さらに体部下半の櫛条痕と、同一部位の要素間で交換可能である。したがって、本例は土器220系統との関係を考慮しなくてはならない。

土器220類似例の出土している至近の遺跡は岐阜県美濃加茂市牧野小山遺跡⁽²⁷⁾である。同遺跡では、Ca系統土器が深鉢の出土はないものの、壺が出土している。深鉢の主体はCb系のよう、それに対応してか、壺にはCa系統と異なる条痕系櫛描紋とでも言える一群が存在する。また、A系統細頸壺も目立つ。つまり、阿弥陀寺遺跡の系統構成との比較では、B・D両系統の欠落はあるが、それ以外のA・C両系統が並存しているのである。そして牧野小山遺跡の土器群から引き算して残るのが深鉢Cb、土器220類似壺、条痕系櫛描紋壺である。このことは、深鉢Cbに組成するのがこの2つの壺であることを示す。すなわち、付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺は祖型がCb系統分布圏内にあって、それが二枚貝の使用に示されるようにCa系統への傾斜のなかで成立したのである。だから、単純にCb系統と断定するわけにいかない。

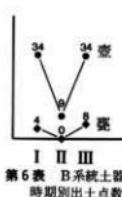
このように、付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺はCa・Cb両系統の並存する尾張南西部において成立した、裏返せばA系統分布圏に最も接近して成立したのである。そのことは、付加沈線磨消帶手法の採用に示されている。

さて、土器220の系統はいざれにあるか。現状では、阿島式・横田式という天竜川流域に分布する一群に求めるのが妥当である。

ii. B系統土器について

阿弥陀寺遺跡で出土するB系統土器は、全体的な傾向として第6表のように壺が多く甕は少ない。

I期 壺は太頸壺が多く、細頸壺は2点確認したのみである。太頸壺は口縁部形態が受口状口縁をなす例と単純口縁をなす例の二者があり、出土点数は後者が圧倒的に多い。



第6表 B系統土器
時期別出土点数

紋様的には、231が頭部の隆起が顕著でそこに斜位の沈線紋を施していることから〈続条痕紋系土器〉への傾斜が強いと言えるくらいであって、多くはより櫛描紋系土器への傾斜を強めている。三河地方などB系統土器分布圏では〈続条痕紋系土器〉と櫛描紋系土器との間を埋めるバリエントが豊富であ

り、のことと比較するなら、阿弥陀寺遺跡での〈櫛描紋系土器〉への傾斜はA系統土器との関係にあるのかもしれない。

B系統壺のうち〈櫛描紋系土器〉に傾斜したグループを特徴づけるのは、単純口縁太頸壺では口唇部の櫛描紋と単独圧痕（多くは指頭による）、口縁部外面の幅の広い凹線状のハネアゲ紋、頸部の付加沈線磨消手法と櫛描紋の組み合わせ（これがA系統土器との共通項になる）、体部上位の沈線連弧紋、体部の櫛条痕である。

甕は、A系統甕（Aa）に近似した特徴を有するグループと口縁部内面・口唇部に櫛描紋（多くは波状紋または連弧紋）を施すグループに分れる。そしてどちらにも共通する特徴としては、体部の調整が二枚貝によらず櫛で行われること、調整痕の傾きがA系統では左上がりなりに対しB系統では右上がりに施されることが指摘できる。つまり、A系統/B系統=二枚貝/櫛=左上がり/右上がりという2項の反転関係⁽²⁰⁾としてA系統甕とB系統甕の関係を見ることができるのである。

II期 付加沈線磨消手法の研磨の脱落による形骸化と、櫛描紋施紋部の縮小が認められる。付加沈線磨消手法の形骸化はA系統土器でもパターンは異なるが見られるので、I期からの弛緩が並行的に進行すると言える。

III期 紋様構成には3類に区分できる。1類：もっぱら櫛描紋からなり、連弧紋などをまじえるが基本的には横帯構成をとるもの、2類：沈線紋と櫛描紋の組み合わせで、紋様部上半は横帯構成、下半は懸垂紋の配置を主な意匠とする綱型構成をとるもの、3類：沈線紋を基本として、横帯構成の斜格子紋を施すもの、である。この三者はIII-1期から並行し、頻度差については出土点数が少ないので有意な相違は認められない。

甕はいずれも台付甕である。口縁部の形態は非常に特徴的で平坦画をもって強く外折し、口唇部には板でD字刻みが施される。体部はナデ仕上げされる。脚台は底部が厚く台付鉢のようである。同じ台付甕でありながらも、独自性が表出されている。

iii. D系統土器について

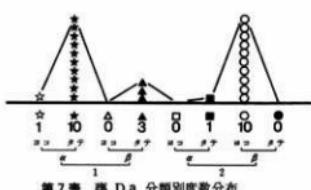
D系統に含めたものは甕がほとんどであるけれども、これまで近江系土器として問題にされてきた土器も含んでいる。したがって、内容をさらに区分する必要がある。

そこで甕については、口縁部内面に波状紋を施す単純口縁甕と波状口縁甕の二つをDwとして、それ以外の有段波状口縁甕と体部上半にハケメ工具の直線紋（連続ヨコハケメ）を施すもの、口唇部にハケメ

工具で大きな圧痕を施すものをDaとして区分する。

甕は現在までのところ良好な資料は出土していない。予測でしかない。

I期 Da系統 壺は口縁部をヨコナデした後、口縁部内面に瘤状突起を付け、口唇部にハケメ工具で直交する刻みを施すのが特徴である。頸部は多条沈線を施す。体部は不明。



第7表 甕 Da 分類別度数分布

要。頸部は1:く字状をなすものと2:緩く外反するもの、口唇部は α :単純に終わるものと β :下方に垂下して拡張されるもの、体部上半は連続ヨコハケメを施すもの—ヨコとタテハケメのみのもの—タテ、がある。以上が個体でどのように組み合っているかを調べると、それぞれの点数は

1 α ヨコ—1 1 α タテ—10 1 β ヨコ—0 1 β タテ—1
2 α ヨコ—0 2 α タテ—1 2 β ヨコ—10 2 β タテ—0

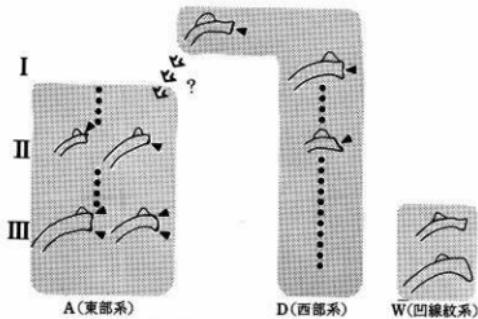
となる。

つまり、1 α タテと2 β ヨコは型類として安定しているのであり、さらに口唇部への大きな圧痕が前者に強く相関することも両者の独立性を保証する。そこで前者を要Da- α 、後者を要Da- β と呼ぶ。そして、有段波状口縁要が有段部を削除すれば要Wa- β に一致することは、有段波状口縁要の系譜関係を明瞭に示していると言える。ところで、この両者の系統的帰属であるけれども、分布図でいえば尾張南西部はその東端に位置し、西は近江地方南部・山城地方にまで及ぶきわめて広域な分布図を形成しているので⁽²⁹⁾、地域を限定するかたちでの特定は困難である。型式的に類似する「大和形要」のサブグループとして位置づけておくのが穩当であろう⁽³⁰⁾。

II期 II期になると、壺は637・727のようにA系統に収斂される。口唇部の上下端を別に刻む手法であり、直交して一度に刻むD系統とは異なる。D系統としては出土していない。

要はDa- α が消滅し、Da- β 系列に限定される。しかし、すべてが非A系統として分離できるわけではなく、体部上半の連続ヨコハケメが647・4649・761のように断続的に施されるものもあり、壺と同様に収斂された部分を考えたほうがよいかかもしれない。

III期 III期も要Da- β 系列は存続する。別のところで「弱加飾単純口縁要」と呼んだものに相当する。これ自体識別に困難はないが、問題は同様の手法が採用されているW系統要の評価である。W系統要はすべて内面ケズりであり、内面ケズリの分布図からはずれる伊勢湾西岸部での成立は可能性が低い。余地があるのは、尾張南西部と近江地方北部である。壺は1点(1460)出土している。



第251図 D系統（瘤状突起付太壺）壺の変化

vi. W系統土器について――――――

■組成

太頸壺Wa 口縁部は緩く外反し、口唇部は若干垂下して拡張され、櫛描紋や圧痕紋の施されることを特徴とする。いわゆる凹線紋を施す例は少ない。頸部は、ハケメ工具刻みを施した幅広で偏平な突帯を施す例と、直接ハケメ工具圧痕を施す例がある。時期差と考えている。口縁部内面には扇形紋やハケメ工具による羽状圧痕紋を施す。

Wb 口縁部は上方に立ち上がって受口状をなす。外面は凹線紋が施される。頸部はハケメ工具刻みを施した幅広の偏平な突帯を施す例と、直接ハケメ工具圧痕を施す例がある。Waと同様時期差と考えている。簾状紋の施されることとはまず無い。

Wc 上記二つに比べて小形である。短い頸部に受け口状口縁が付く。口縁部外面は凹線紋が施される。頸部には簾状紋が必ず1段めぐる。体部形態はソロバン形が基本。

Wd 口縁部が袋状をなし、頸部には断面三角形突帯がめぐる。大形の器種である。口縁部外面は紋様帶として凹線紋・ハケメ工具羽状圧痕紋・直線紋などが施される。

細頸壺Wa 口縁部は太頸壺Wdと近似するが頸部は長い。口縁部外面には凹線紋、ハケメ工具あるいは櫛によって直線紋・圧痕紋・羽状押し引き紋が何段も施される。最初は凹線紋も少条で形態も口径>口頸部高でイチジク形を呈するが、新しくなると口径と口頸部高となって上下に詰まつてくる。そしてこれに対応して凹線紋下の紋様がハケメ工具圧痕紋のみとなる。また頸部には簾状紋が施されるようになる。

体部形態はソロバン形が基本。体部下半の外面調整は、ケズリ→ハケメまたは板ナデである。研磨する例もあるが、これはおそらく地域差に関係する。紋様は櫛描紋が主で、櫛III種も多い。構成は直線紋と波状紋の反復か直線紋帶の最下段に波状紋を1帯めぐらす2つの場合が主である。

Wb 口縁部は太頸壺Wbに近似するが頸部は細い。口縁部に凹線紋を施す以外基本的に無紋でハケメ調整のままである。タタキ痕を残すものがある。A系統細頸壺(変容: 926)の変換かもしれない。

短頸壺 く字状に外反する口縁部をもち頸部直下には紐孔を穿つ。口唇部は回転ヨコナデでおわるものと凹線紋を施すものがある。

円窓付壺 A系統からの変換である。口縁部は緩く外反するものと水差し形土器のような直口のものとがある。体部はソロバン玉状を呈する。基本的に無紋。

壺 平底 強く外折する口縁部をもち、体部は最大径部が上部3分の1ぐらいにあって、底部からの立ち上がりは内輪気味をなす。外面調整はタタキと粗いハケメの組み合わせで変化がある。ハケメ工具の圧痕紋や直線紋、波状紋を加える例もある。内面は下半3分の2にケズリが施される。底部は平坦なものと内輪して上げ底のものがある。ケズリやハケメを施す例もあるが、多くはナデで消されている。

脚台付 ケズリ込んで高台状にしたWa、A系統との折衷型であるW(A)、完全にW系統として定着したWbがある。組列はW(A)→Wbとなり、Waは除外される。

口縁部から体部の形状は平底と大差ない。紋様との相関は平底と異なるようであるが確証は無い。

受口状 底部の形態は分からぬが、口縁部が小さく受口状をなす例がいくつ出土している。体部外面には連続ヨコハケメを施す。

高杯 Wa 杯部の形態は太頸壺Wb口縁部に近似する。外面には凹線紋が施される。

Wb 水平環状口縁と内面の突帯に特徴づけられる。口唇部には凹線紋や波状紋が施される。脚部は連続成形で円盤充填が行われる。調整は外面をけずる例が見られるのに対し、内面をけずる例は少ない。また脚部上位や裾端部への凹線紋はほとんど無い。

Wc 小形の鉢状の杯部をもつ。口縁部外面に凹線紋、その下にハケメ工具の羽状圧痕紋や押し引き紋を施す。

以上が主要器種である。他には、取手の付いたコップ状土器や、各種の鉢がある。

■紋様

櫛捲紋 直線紋、波状紋、簾状紋、扇形紋、縱形流水紋などがある。施紋方向は右まわりで、回転運動を利用しての施紋が特徴的である。原体は櫛III種が多い。

凹線紋 沈線を施した後回転ヨコナデを加えて仕上げる。少数ではあるが、沈線を施さない凹線紋もある。

太頸壺口縁部の凹線紋の場合は、櫛で縦位に何箇所か切られる。

突帯紋 幅広の偏平なハケメ工具刻みをえた突帯、断面三角形突帯、甕の頸部に付加した粘土紐に指頭圧痕を加えた指頭圧痕紋突帯などがある。このうち、時期差に関わるのは最初の例だけである。

圧痕紋 ハケメ工具、櫛、管状工具、指などで施される。

瘤状突起 口縁部内面に多数配置する。

■調整

タタキ 筋溝が細くわりと平板的なもの、筋溝の幅と筋間の幅が同じぐらいで凹凸が顕著なもの、とがある。ほとんどの器種に観察できる。

ケズリ 壺は体部外面下半、甕は内面下半、高杯は杯部や脚部外面に観察できる。

研磨 壺は体部外面下半、高杯は杯部や脚部外面に観察できる。壺の場合、横方向は伊勢湾西岸部系である。

*

■W系統土器の性質

III期を特徴づけるW系統土器の波及に際して、「近江系土器」が完全に同調しないことは、両者の関係が決して緊密ではないことを示している。ということは、「近江系土器」自体は彼の地における「在来系土器」としてW系統土器とは別の〈層〉に存在するのであり、伊勢湾周辺地方と同じ状況にあることになる。すなわち、分布上一見表層的な「外來系土器」としてのW系統土器と、それに対する基層的な「在来系土器」としての「近江系土器」でありまた「伊勢湾系土器」である、という図式が成立するのである。そして、W系統土器は単に表層的であるにとどまらず、広域的な機動性を示して基

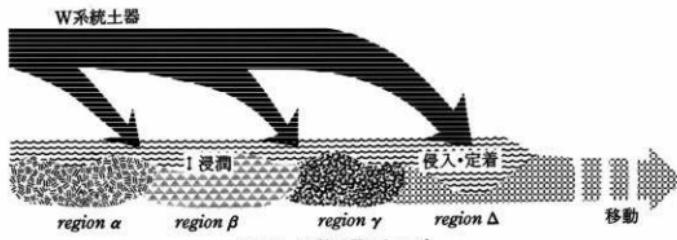
層である「在来系土器」の崩壊を引き起こすのであり、その典型が伊勢湾地方において認められるのである。こうした状況をパターン化して整理すると次のようになる。

「在来系土器」を土器A、「外来系土器」を土器Wとして大別する。そして両者の関係のなかで新たに生まれた土器を土器Mと呼ぶ。土器Mは土器Aからも土器Wからも単独では生まれないものであり、その意味で単なる中間的存在ではない。相互作用のもとに成立するのである。従って、折衷型一般ではなく、折衷型土器の専有化による固有器種の成立としてとらえるべきものと考える。つまり、土器Aが土器Wの侵入を契機に組み替えが行われ、土器Aは存在形態を変えて存続すると言うことができるるのである。

伊勢湾地方へ波及していくW系統土器がどのような集団的背景のもとにあるかは、よくわからない。型式学的特徴の発現地は中部瀬戸内、より限定するなら吉備地方周辺を考えざるを得ないわけであるけれども、器種組成の組み替えが周辺にいくほど増幅されるという型式学的な空間分布の不連続性を見ると、広域にW系統土器として括ることを躊躇する。

伊勢湾地方に展開するW系統土器と型式学的に接近する地域を推測すると、例えば壺の紋様では、簾状紋は河内地方に分布の中心を持ち、それが突縫紋の併用にも絡んで部分使用であることはその周辺（北河内・攝津から山城あたり）に関係することを示すと考える。その他、台形土器であるとか、台付無頸壺、台付鉢などもこれら周辺に関係の深いことを示している。しかし、体部内面下半部にケズリを施す平底甕は上記地城ではあまり見られず、近接地城では近畿の日本海側地方や北陸地方のほうが主体的であり近江地方にも分布すること⁽³¹⁾、壺の受口状口縁と頸部の刻みや体部下半部のハケメなどが近江地方において卓越することなどを見ると、W系統土器の諸要素の系譜が幾つかの下位系統に別れる可能性があるにしても、伊勢湾地方波及前に近江地方でそれら諸要素主要部分の複合が行われた可能性が極めて高いと考える。

この点に關係して伊勢湾地方におけるIII期の土器に係わる情報の流れを概観する（第253図参照）と、たとえば情報伝達がそれほど意的ではないと言われる甕の調整・施紋手法⁽³²⁾にもとづく分布圏の相互関係は、近江地方の〔強加飾受口状口縁甕（口縁部や体部上半に櫛刺突尖・直線紋・波状紋など紋様要素を複数組み合わせる）〕と伊勢湾西岸部の〔強加飾単純口縁甕（強加飾受口状口縁甕をあまり紋様構成を変えないで単純口縁にした甕）〕の両分布圏が伊賀盆地を中心とする南部の山間部でリンクしてU字状に閉じた分布圏を形成し、甕W分布圏と対立的にかなり安定した分布圏を形成するのに対し、伊勢湾東岸部は甕Wの

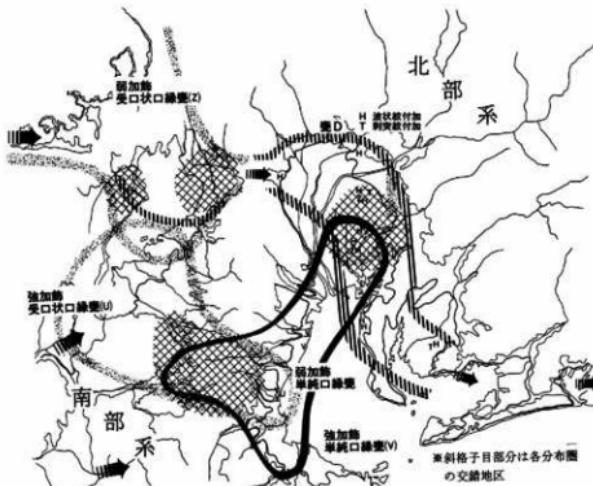


第252図 W系統土器のイメージ

広域分布を基盤にして北西から南東に開いた分布圏を形成し、周辺要素を取り込んで加飾傾向を発現する⁽³³⁾。

甕Wの主要な加飾手法としてある体部上半のハケメ工具による直線紋(通常ヨコハケメ)は、伊勢湾西岸部と尾張南西部に分布する〔甕Da-β(強加飾単純口縁甕)と異なり、紋様が体部上半の直線紋のみで中期前半以来の伝統的器種〕と関係するか、あるいは近江地方北半部の〔弱加飾受口状口縁甕〕と関係するかであるが、甕Wのバリアントとしてまだ出現する連続ヨコハケメのみの加飾度の低い受口状口縁甕に注目するなら、近江地方北部との関係が想定できる。したがって、情報系としては、閉鎖的な〈南部系〉、開放的な〈北部系〉と言うことができる。そして、W系統土器波及の主要な流れは〈北部系〉に一致するものと考える。

W系統土器の本源的成立地を中部瀬戸内、とくに吉備地方に限定できたとしても、変化の主体は吉備地方周辺から進出した集団ではなかろう。何故なら、すでに述べたように周囲的な変化がみられるという状況は、生産・消費基盤の中心から周辺への一元的な拡大というのではなく、受容者側の存在が前提され、その個性が地域差として現れるからである。端的に言うなら、伊勢湾周辺地方に進出してきた集団があるとしても、その大多数は決して遠隔の地から直接来たわけではなく、基本的には隣接地域間の交通の連鎖を超えるものではなかったと考える。だが、こうした連鎖を成立させるためには中部瀬戸内地方に由来する〈固有の情報体系〉を優位とする態度保持者が〈層〉として存在しなくてはならないのであり、しかもそれが直接土器生産者でなかった場合をも考慮するなら、集団内部における特定の土器情報の垂直的な位置と、他の情報に対する優位性(支配的傾向)を保証する〈力〉の実態の把握が今後の重要課題となろう⁽³⁴⁾。



第253図 III期各種甕分布図

e. 土器の変化－折衷型土器について

本文では、「折衷型」として幾つか土器を説明した。折衷型という範畴は、一つの個体を構成する要素群が、通時的・共時的に問わざ分布圏を異にして存在する要素と共通する場合に、その共通性が偶然ではなく他の影響の下に出現したと認めた個体について適用した。したがって、基本的には1個体の要素群が複数の系統に分かれることを前提とする。

折衷型はその時々に出現して時間的に連続した系列を成立させず不安定な性格を見せることが多いものの、ときによっては安定的に独立した系列を形成することがある。折衷型として括られた範囲には、器形・調整・紋様などの諸属性において、一方の系統に限りなく近い（他方からは限りなく遠い）ものから限りなく遠いもの（他方には限りなく近い）まで幅がある。とくに、紋様は共通しているが器形が異なるとか、器形・紋様はほとんど同一であるにもかかわらず調整がほんの小さな部分だけ異なるとかいうようなこともあります、各属性においてもそれぞれ遠近の度合いは異なるのである。とすれば、折衷型の細分を單一の基準で行うことは不可能なのであり、器形・調整・紋様はどれをとっても重要な指標なのであるから器形を重視するとか紋様を重視するという偏った態度は避けねばならない。

■変容と変換⁽³⁵⁾

折衷型土器が異なる系統の相互影響で成立するというとき、相互影響が均等でどちらにも頗かない場合、どちらか一方にはほんの小さく傾く場合、どちらか一方に大きく傾く場合といった区分が一応はできる。このとき、ある系統を基準にとれば、その系統からの型式学的な逸脱の度合いが傾きということになるだろう。したがって、逸脱が型式学的連続の成立する範囲に含まれる場合、それを〈変容〉と呼び、逸脱が型式学的連続を超えててしまう場合、それを〈変換〉あるいは〈転移〉とよぶ。そして、〈変換〉のあるものについては〈模倣〉との関係で別に検討することにする。このような視点によって、土器に含まれる情報とその周辺環境（社会的、制度的など）との関係を理解する可能性が生じるのでないかと考える。情報の流れに表面化する背後の状況が把握できるかもしれないという思いがある。

ある系統への帰属認定は、変異の可能範囲を想定した上で、その中で保持されている型式学的特性の連続を重視した系列の確定をまず行わなければならない。その上での遠近ということになる。系列はすでに述べたように、A・B・C・D・Wの5系統に整理した。ここでは再度詳述はしないので、事実記載および先行する分析記載を参照されたい。

(1) 折衷型土器の事例

表記方法について	変容 (B/C)	…Cの影響でBが変容した。
	変換 (A→D)	…AからDへ技術的基盤の移動を伴い変換した。出土地区が重要。
	変換B (B→A)	…BからAへの「全体の表現手法」の変換はあるが、技術的基盤の移動は伴っていないと推測できるもの。出土地区が重要。

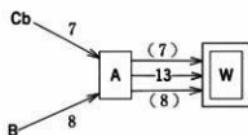
I期	34	8411A系変容 (A/W).	72	1106は脱口系で変換。(B→A) A.
1	3は複数Cbを二枚貝調節で制作している。脱 口部	35 862は脱Aで変換。(A→W) W.	73	1179 “ B(B→A). 袋状は
C系変容系で変換。Cb (Cb→Ca).				届かず上下にゆれている。
2 17と23は形態がよく似ている。17はA系変容 (A/Ca).	36 879 “ “ “	74 1180はA系変容 (A/W).		
	37 880 “ “ “	75 1181 “ “ “		
3 37の口端部は受口状口縁をなしている。C系 38 895は脱Bで変換。(B→W) W.		76 1189はA系変容 (A/B).		
変容 (Ca/A).	39 896 “ “ “	77 1202 “ “ “		
4 53はB系変容 (B/Ca).	40 899は脱Aで変換。(A→W) W.	78 1204 “ “ “		
5 69はA系変容 (A/Ca).	41 905はA系変容 (A/W).	79 1205 “ “ “		
6 105はA系変容 (A/Ca).	42 967 “ “ “	80 1238 “ “ “		
7 158はB系変容 (B/A).	43 998 “ “ “	81 1232 “ “ “		
8 189はA系変容 (A/Ca).	44 926 “ “ “	82 1233 “ “ “		
9 199は脱C系で変換。(Ca→A).	45 928 “ “ “	83 1234 “ “ “		
10 221-227はC系変容 (Ca/A).	46 954 “ “ “	84 1241は脱A系で変換。(A→W) W.		
11 263はA系変容 (A/Ca).	47 966 “ “ “	85 1250は脱B系で変換。(B→A) A.		
12 302は脱B系で変換。B (B→A).	48 976 “ “ “	86 1264は脱Cb系で変換。(Cb→A) A.		
13 391は脱Cb系で変換。(Cb→A) A.	49 1022は脱B系で変換。(B→A) A.	87 1265 “ “ “		
14 402 “ “ “	50 1023 脱B系で変換 (B→A) A.	88 1266 “ “ “		
15 495はB系変容 (B/A).	51 1025 A系変容 (A/W).	89 1267 “ “ “		
16 608はB系で変換。(B→A) A.	52 1026はA系変容 (A/W).	90 1270はA系変容 (A/W).		
17 631はC系変容 (Ca/A).	53 1031は脱B系で変換 (B→W) W.	91 1292 脱A系で変換 (A→W) W.		
18 633は脱A系で変換。(A→D).	54 1044はA系変容 (A/W).	92 1301は脱Cb系で変換。(Cb→A) A.		
II期	55 1042はW系変容 (W/B).	93 1302 “ “ “		
19 246は脱B系で変換。(B→A) A.	56 1052はA系変容 (A/W).	94 1303は脱Cb系で変換。(Cb→A) A.		
20 637はD系で変換。(D→A) A.	57 1064 “ “ “	95 1310はA系変容 (A/W).		
21 666は脱B系で変換。(B→A) A.	58 1065 “ “ “	96 1319 “ “ “		
22 710は脱Cb系で変換。(Cb→A) A.	59 1074 “ “ “	97 1322 “ “ “		
23 713はA系変容 (A/W).	60 1111は脱Aで変換 (A→W) W.	98 1337 “ “ “		
24 715 “ “ “	61 1113 “ “ “	99 1339はB系変容。		
24 723はCb系変容 (Cb/A).	62 1118 “ “ “	100 1365は脱B系で変換。(B→A) A.		
25 776はA系変容 (A/B).	63 1119 “ “ “	101 1366はA系変容 (A/W).		
26 807は脱Cb系で変換。(Cb→A) A.	64 1120 “ “ “	102 1370 “ “ “		
27 809は脱B系で変換。(B→A) A.	65 1144は脱A系で変換。(A→W) W.	103 1374は脱B系で変換。(B→A) A.		
28 810 “ “ “	66 1145 “ “ “	104 1391はA系変容 (A/W).		
29 831は口唇部がB系。A系変容 (A/B).	67 1174 “ “ “	105 1404は脱A系で変換 (A→W) W.		
30 834は脱B系で変換。(B→A) A.	68 1261 “ “ “	106 1423 “ “ “		
31 835は脱Cb系で変換。(Cb→A) A.	69 1385 “ “ “	107 1427は脱B系で変換。(B→A) A.		
32 844は脱B系で変換。B (B→A).	70 1164は脱Cb系で変換。(Cb→W) W.	108 1449はA系変容 (A/W).		
33 851は脱D系で変換。D (D→A).	71 1165はA系変容 (A/W).			

(2) 折衷型のパターン

I期 出現率は17:636の2.6%。変換は7例で折衷型の38%、そのうち2点がCb→A、1点がCa→A。変容は、A-Ca間で8例、内訳はA/Caが5例、Ca/Aが3例。A-B間はB/Aが2例。A-Caの相関は11例で64%となり、A-B間は11%だから、差は大きい。阿弥陀寺遺跡におけるA-B間の関係はほとんど土器の搬出入のという物資の移動関係であって、相互作用という影響関係とは余り関係ないのであろうか。それに対しA-Ca間の関係は搬出入の関係もあるが、分布図の隣接を背景にしてのより緊密な交流であろうか。

II期 出現率は17:220の7.7%。変換は11例で折衷型の65%。すべて→Aであるが、全体の数量が少ないこともあってA系統との関係における相関差は認められない。しかし、全体の影響関係がA系統に向う点は重要である。

III期 出現率は74:602で12.3%と他より多い。変換は32例で折衷型の43%。うち、→Aは15例、→Wは17例である。しかし、A→Wは13例あるのに対しW→Aはない。B-Aが8例、Cb-Aが7例である。



第254図 各系統相関図

したがって、上図のように、CbやBからのAへの流れもWへと集束するのであり、一方的でさえある。

変容はA系細頸壺口縁部のヨコナデ手法に占められ、他に太頸壺頸部の断面三角形突帯など紋様に関わってある程度で際だった変化は無い。だが、ほとんどIII-1期に限定されており、W系統出現初期における相互作用が部分的にとどまっていたことを示している。III-2期以降に台付壺を始めとして変換が盛行することとは対照的である。

(3) 折衷型の成立条件

変換と変容を区別して考える。

変換は、一方の系統から他方の系統への型式学的移動であると考えるならば、表面的な接触関係では生じない。I-1期にはまず見られなかった深鉢CbのA系統への変換（志向性はCb系統を向く）がI-2期以降顕著になることは、深鉢Cbの分布圏がすでに阿弥陀寺遺跡を覆っていたのにそれがなかなか変換に至らなかったということから言えば、変換に至るための条件が形成されていなかったということになろう。また、III期におけるW系統への変換のうち、特にA系統台付壺のW系統への変換が1時期遅れることも、同様に変換に至るための条件が整備されていなかったことを示している。すなわち、製作技術に関わるのであれば習得による「技術的基盤の共有」が達成されねばならないのであり、こうしたことを可能とする「場」を前提とする。それに、「統合」を促進する社会的基盤も必要であつ

たであろう。ここに至って、〈特定の場所〉において変換されたのか、変換されたものも移動するのかという点に関わって製作地の特定が重要になってくるのであるが、この点に関して十分な解答は用意していない。

変容は、型式学的範疇が強固であれば別であるが、変換ほど技術習得の〈場所〉を強く要求するものではないから、分布圏の重複地区であれば各系統の情報が錯綜しているので発生する条件は整っている。あくまで部分的な要素の借用による型式学的範疇の拡散であるから、表面的な接触による偶然的成立も有り得ると想定できる。だが実際は、変容も決して広範囲に起ることはないようであり、変換とはレベルが異なるものの、一定の社会的背景が関与すると考える。つまり、変容も一定の方向性を有しているのであって、ブラウン運動的に四方八方と相関するわけではない。

I期でA-C間がA-B間を凌駕して変換・変容関係を形成していたことは、両者の分布圏が重複していたことが第一の理由ではなく、Ca系統の二枚貝使用にその一端が示されているように、A系統地域との関係保持が必要であるというCa系統側の事情が大きく左右していたのではないだろうか。つまり、土器の搬出入という表面的な関係ではなく基礎的な交通関係を背景として変換・変容が行われたのであり、だから単なる土器の搬出入関係であったCb系統においてはそうした交通関係を基盤に持たなかつたが故に変換・変容の開始が遅れたと言えよう。

III期は、W系統土器の出現が単に異系統土器分布圏の拡大ではなく、この地方に侵入・定位したことが分布圏重複の基盤として存在し、その結果交通関係が深化した。そして相互浸透せざるを得ないような基盤の形成はA系統全体の脱A系統を促進したが、反面そのことが全面的なW系統への移行を抑制したのではないか。

(4) とくに変換について

ここでは、変換を模倣という観点も含めて再検討してみたい。

模倣とは、「まねること」である。土器製作の習得自体おそらく模倣に始まる。だからとくに模倣として検討することは、その意識的行為としての対象の如何が問題となる。

安定した型式学的連続が認められるというのは、“模倣の対象が固定され(=情報系の閉鎖状態)、逸脱の許容されない状況においてその模倣の繰り返しによって系統が保持される”ということである。そして、そこでは内面化されたモデルが伝達されていく。したがって、そこにおける変化はあくまで内的変化である。

それに対し、型式学的連続が不安定になったり途絶えたりすることがある。系統そのものの消滅や、分岐に際しだいかく逸脱することがある。系統の消滅する場合は、完全に消滅する場合と、別の系統に転移して存続する場合がある。型式学的連続が分岐する場合は、みかけ上は同じなのだが技術的基盤の変化する場合が重要である。

I-2期以降の深鉢Cbの分岐はA系統への変換となって技術的基盤の移動をみせるが、このような型式学的連続の分岐は製作者の分岐が一致する(内的分岐)のか、A系統製作者の模倣による分岐(外的分岐)であるのか判断は難しい。考えられるのは、①そうした事例が何故I期に起こらなかったかに注目して、I-2期以降A系統がCa系統を統合したことによるA系統の相互作用範囲の拡大によってC b系統と直接することになったことを評価するか、②A系統内部に逸脱を許す条件が存在した、と見

るかである。II期において、変換のベクトル(志向性の方向を意味しない)が各系統からA系統へ集束することを重視するなら、この時期の全体的な傾向の一環として前者の可能性を考慮すべきかもしれない。

III期における台付壺AのW系統への変換は、技術的基盤の変化と系統の消滅がシンクロした例である。その変換においては技術的基盤に断絶はあるものの、生活者の断絶ではなかったが故に技術的基盤の断絶を超えて、生活用具としての台付壺という〈フォルム〉の連続という、よりハイレベルの連続が維持されたのであろう。だから、もともと台付壺を使用しないW系統の模倣とは考えられない。生活様式の変化となってしまうし、III期における全体的な変換・変容の方向性からいって矛盾するからである。この意味でいえば、W系統内部の変化に注意しなければならない。一つの系統として括られたなかに、実は異なる系統の書きが隠れているかもしれない。

III期は、A系統からW系統への変換以外に、B系統やC b系統のA系統とW系統への変換も起こっている。いずれも技術的基盤の転移であるが、C d系統の変換が比較的元の特徴を残しているのに対し、B系統の場合は元に無い新しい〈形〉を生み出している。これは明らかにモデルの変形であり、新しい要素を加えるありかたでの逸脱である。したがって、C b系統について単なる模倣(系列の模倣)とするなら、B系統は創造的模倣と言えよう。その場合の模倣の行為者は、D系統に転入したB系統製作者であったか、W系統製作者であったのか、どちらであろうか。

模倣が行われるとは、それを意識的行為と考えるならば、①製作者が從来の土器製作環境のなかで集団の圧力(規制)によって他の製作者と同じものを製作していた〈場所〉から別の〈場所〉への移動(転入)によって、從来の規制からの解放だけでなく全く新しい〈場所〉に臨んで新しい技術を習得した結果、それまでの無意識的な製作活動から一時でも意識化された製作活動を経験したことによって、從来の規制から逸脱した土器を製作することになった、②製作者の所属した〈場所〉そのものの離散と再統合の中で、規制の密度に差ができ、逸脱を許容する状況が発生した、③製作者の所属した〈場所〉の規制が何らかの事情で新しい価値のもとに再編成された、などいくつかの可能性を考えられる。

①については、転入先の規制が新たに加われば、独自性の表出是不可能なので、①と②の複合した状況も考えられる。③は製作者の所属する集団の動向にも関わってより根源的であり、型式学的連続の消滅に対応するかもしれない。

さて、III期の変換においては、A系統へのベクトルが①・②に関係し、W系統へのベクトルが③に関係するのではないか。あるいは全体的環境が③となり、その内部で①・②が起こった可能性もある。

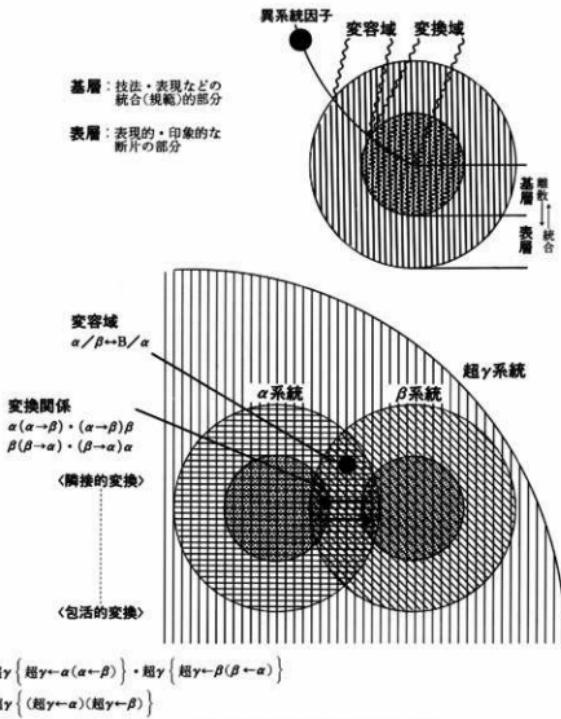
(5) 変容について

変容は、模倣の繰返しによるモデルの内面化とその連鎖における変化(内的変化)ではない。これも系統からの逸脱傾向を示すものであるから外的変化である。この外的変化は外部からの影響によって引き起こされる。しかし、変換とは異なって外部からの影響は表面的に終始すると考えたほうがよい。

例えば、III-1期細頸壺の口縁部への回転ヨコナデが、W系統からの影響であることは、II期以降口縁部にヨコナデを施していた無紋系(磨消ハケメ帯系)だけでなく、口縁部を紋様帶としていた櫛描紋系や磨消線紋系にも採用されるという普及状況に示されている。しかも、口縁部への回転ヨコナデは細頸壺のみに限定されず、太頸壺にも及んでいるのであって、このことは凹線紋に象徴されるW系統

土器の基本的手法が周囲に大きな影響を与えていたりだと評価できる⁽³⁴⁾。しかしそうはいっても、A系統土器の特性は保持されているであって、逸脱傾向は示しても型式学的範疇からの逸脱までには至っていない。だから変容として把握することになる。

現状において変容が変容のまま停止することはない。III期の例では、III-2期以降に表面化する変換の前段階としての意味が大きいのである。つまり、III-1期におけるD系統土器の侵入・定位が周辺に直ちに根本的な変化を引き起こしていないのは、一定期間の作用すなわち＜技術的基盤の共有＞を達成する過程、見方を変えるなら特定系統の技術的基盤が周辺系統の技術的基盤を駆逐する過程を必要としたことを典型的に示しているのではないだろうか。だから、III-1期はA系統土器がまだ土器複合体としての存在の仕方をしているとしても、すでに接触は始まっており新しい段階に移行していると考えられるのである。



第255図 系統概念図と相互関係概念図

f. 弥生土器総括

大別と細別 I期～IV期の大別4区分については、器種の消長や器種を横断する表現手法(モード)などの変化をめぐって從来の立場を変更せざるをえないような状況に至ることはなかったけれども、細別ははっきり言って不十分である。「組列」の設定においてモードを中心にして進めた部分は基本的には問題はないと考えられるが、モードの及ばない異なる組列との並行関係などについては十分把握するには至らなかったからである。この点は今後詰めなければならない。

系統と群 型式学的な区分において、複数の系統それぞれに時間的な系列を認め、それを横断するかたちで共時的な器種組成を設定した場合、果たしてそれが他と区別される〈群〉としてどのように把握できるのかという点について議論が残ることになった⁽³⁷⁾。

各系統の関係は、第8表のように〈在来系〉と〈外来系〉という区分枠の中で比率的には〈在来系〉が優位にあるという程度で確固たる〈齊一性〉を見せるわけなく、型式学的には離散的な状況を示しており、全体を〈群〉として統合することについて躊躇せざるをえないのが正直な感想である。かえって、各系統それぞれの分布圏の交錯する地区として阿弥陀寺遺跡があるのではないかというようなありかたの中で、重層的な状況を人為的に切り取ったものが今回の共時的器種組成だという気がする。だから、はたして自然区分としての〈個性ある群〉設定が可能であるのか、現在のところ定見はない。しかし、土器の生産と消費というサイクルが、完全に開放することなく、また完全に閉じることがないのであれば、あるレベルにおいて他との比較において〈個性ある群〉を抽出することは可能であると考えたい。そこにおける問題はそうしたレベルの設定とレベルの評価である。「様式論」の検討が心要である。

画期 I期～IV期への変遷における最も大きな画期は、II期とIII期の間にある。ここでは、土器の製作技術およびその使用に関する伝統が大きく変化しているのである。それは単にW系統土器(凹線紋系土器群)の分布上の変化というような表層的性格ではなく、在地の伝統を土器製作レベルにおいて「断ち切る」という基層的な部分に関与する性格がIII期W系統土器には強く伺われるのである。

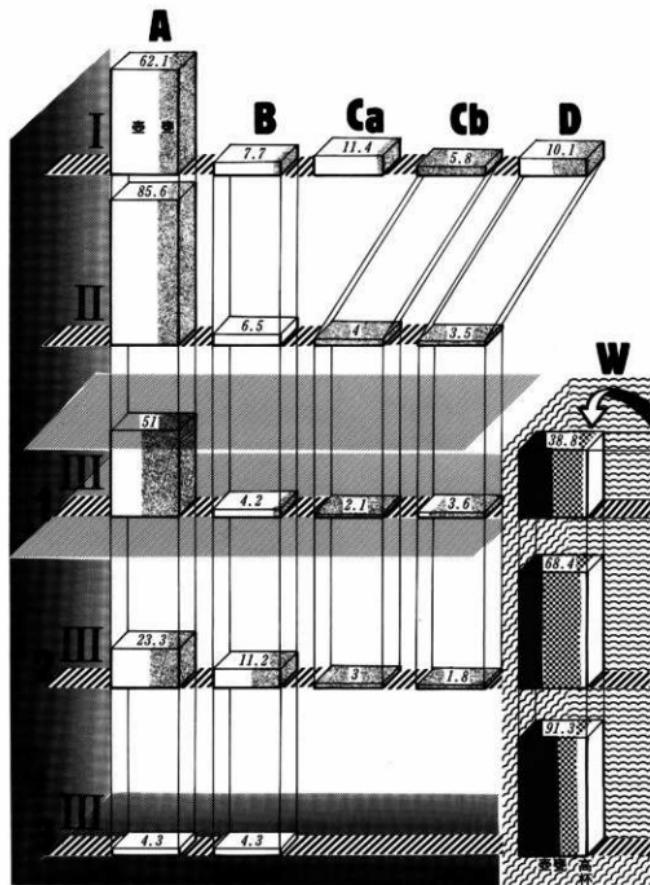
だが、生活においては、台付甕のA→W(A)→Wbという変換に認められるように、消費されるべき器種は位相を変えて存続しており、そこに土器の変化が決して生活者の変化に完全に一致するものではないことが示されている。というより、土器の変化はまず土器の変化として評価せねばならないのであり、それが生活者の変化を示すかどうかは次元の異なる議論なのである。その意味で、変化が即画期ということにはならない。内的変化であればあくまで連続がベースにあり、不連続をベースとする外的変化とは大きく性格を異にするからである。II期とIII期の間にある画期はまさに後者の典型である。

このように、I期～II期には〈外来系〉が〈非在来系〉として並存して相互の影響関係も一方が他方を解体する方向での関係もなく統合されていたのが、III期にはW系統がA系統を含めた異系統を解体し崩壊させるという関係、一方的な強い関係が広範囲にわたって認められるのであり⁽³⁸⁾、こうした状況において衰退しつつあるA系統には、まさに「瓦解する」という言葉が相応しいのである。

地域性 阿弥陀寺遺跡の土器に表れた地域性は、基本的には伊勢湾地方全体の動向に規制されたも

のである。それは、〈動態〉であってなんら固定されてはいない。他との比較においてでなければ〈個性ある群〉が抽出できないということは、共時的・通時的両側面に通じるものである以上、〈地域性〉も動的に把握しなければ意味がない。静止画のように固定された地域性は観念でしかない。実態は動画である。

今後、画期的理解および伊勢湾地方各地域との詳細な比較検討によって、範囲をもって定位した〈個性〉の把握に努めるとともに、地域性の基盤となる情報の伝送回路を明らかにしていきたい⁽²⁹⁾。



第8表 各系統出土比率（数字はパーセントを示すが、傾向として見た方がまちがいはない）

C. 石器

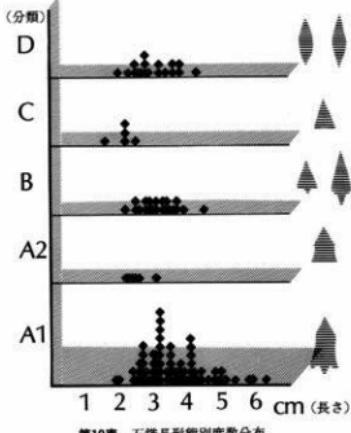
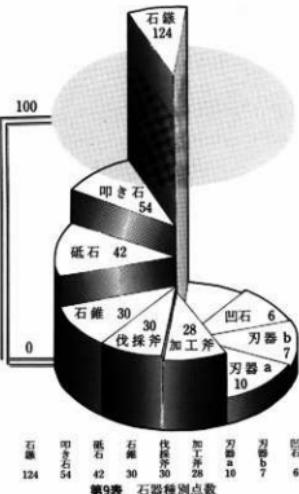
a. 組成

阿弥陀寺遺跡における弥生中期後半の石器組成は、第9表のように石錐が最も多く叩き石、砥石、石錐、伐採斧、加工斧、刃器a、刃器b、凹石の順である。そして、磨製穂摘具の確実な例は未だ出土していない。叩き石が多いのは朝日遺跡も同じで、この地方の特徴のようである。また磨製穂摘具の著しく僅少な点も同様である。刃器bの一部については磨製穂摘具の代用も考えられるとはいえ、点数は少ない。刃部の鋭利なスクレーパーは出土していない。

b. 石錐

石錐は長さの度数分布が第10表のようになる。上からD：柳葉形、C：三角形、B：有茎三角形、A2：五角形、A1：有茎五角形となり、点数は有茎五角形が最も多い。石錐長度数分布のピークは、おおよそ3.2cm位のところにあり、DやBは明瞭なピークを形成しないものの、やはり同じくらいの長さに集中する雰囲気を示している。

ところで、A1にはもう一つのピークが4.1cmのところにあり、他の例より長身であることがはっきりしている。とくに4cm以上のものが6cmを超える範囲まで分布しており、群を抜いている。先の2峰分布が用途差を示しているかどうかは即断できないが、他の石錐長の分布に一致しない範囲については、それを石錐の大型化として理解することはできよう。



2. 自然科学的分析

A. 阿弥陀寺遺跡の土器胎土の特徴について

(1) はじめに

弥生時代を中心として、阿弥陀寺遺跡をはじめとする愛知県下の遺跡から出土した土器を分析し、これらを比較・検討することで、当遺跡の胎土の特徴を明らかにすることを試みた。またこの結果から、この時代の土器の交流について若干の考察も行った。

分析に用いた試料は、阿弥陀寺（甚目寺町）・勝川（春日井市）・トメキ（東海市）・瓜郷（豊橋市）・西中（知立市）の各遺跡および大阪府美園遺跡から出土した、弥生時代中期の土器136点である（第11表）。

分析の方法は、重鉱物分析・実体顕微鏡による表面観察・土器薄片の偏光顕微鏡観察の三種類である。まず全ての土器について、パリノ・サーヴェイ特に依頼し、重鉱物分析を行った。その後、その結果から阿弥陀寺遺跡の在地の土器と推定されるものを抽出し、表面観察と偏光顕微鏡観察を行った。

(2) 重鉱物分析

以下は、パリノ・サーヴェイ特による分析結果をもとに、考察を加えたものである。分析結果は第12表および第256図・257図に示す。

a. 試料のグループ分け

分析結果をもとに各試料の重鉱物組成において優占する鉱物、含まれる鉱物の組合せおよびその量比などから以下のようないくつかの試料のグループ分けを行った。そのグループは、同定粒数が100個に満たなかったNa122を除く135点を5つ（I～V）のグループに分け、さらにIは8つ（1～8グループ）、IIは4つ（1～4グループ）、IIIは2つ（1～2グループ）、IVは3つ（1～3グループ）に細分した。

I グループ

斜方輝石+単斜輝石が優占する。随伴する鉱物の種類とその量比から次の8グループに細分することができる。括弧内の数字は各グループに含まれる試料の個数を表す。

I-1 Na7・14・115 (3)

斜方輝石+単斜輝石が圧倒的に多い。

I-2 Na1・3～6・8～11・15～24・26～28・30・31・36・37・39・41・42・67・110・111 33

斜方輝石+単斜輝石の次に黒雲母が多く、少量の角閃石と微量のジルコン・ザクロ石を伴う。

I-3 Na12・35・55～57・75・85・86 (8)

I-2の組成に比べて不透明鉱物が多い。

I-4 Na29・32～34・88～90・97・100・102・104～108・112 06

斜方輝石+単斜輝石が、角閃石+黒雲母とほぼ同量かやや少ない。少量のジルコンを伴う。